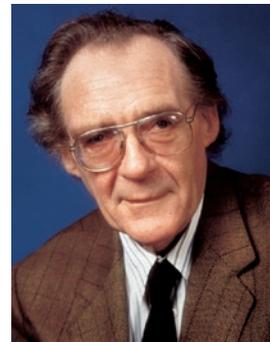


社説

John Maddox (1925-2009)

ジョン・マドックス元編集長を偲んで



Nature Vol.458(807)/16 April 2009

Nature に変革をもたらした編集長を追悼する。

4月12日の日曜日に飛び込んできた Sir John Maddox (サー・ジョン・マドックス) の訃報を、私は *Nature* の同僚とともに深い悲しみをもって聞いた。我々は彼を「JM」とよんでいた。

当惑もあった。最近はずがに体力の衰えが目についたものの、彼は常に行動していて、あらがいがたく、誰にも止めることができなかつたからである。JM は、そういう男だった。ある人は、彼の編集会議をイラク戦争における米軍の『衝撃と畏怖』作戦にたとえた。またある人は、彼を「鉄の意志」ならぬ「鉄の気まぐれ」の男とよんだ。彼は数え切れないほどのタバコを吸い、赤ワインのグラスを重ねて生きてきた。その多くは、深夜、これ以上遅れたらその週には掲載できないというぎりぎりの時間に Editorial (社説) を書くときに消費された。

Nature がジョンに公式に捧げる感謝の言葉は4月23日号で発表する予定であるが (www.nature.com/jm を参照されたい)、彼が *Nature* の編集長を務めていた時代に起きた、おもだった出来事のいくつかを、一足先にこの場で振り返っておいてもかまわないだろう (JM は絶対に分離不定詞を使わなかつた)。ジョンが最初に *Nature* の編集長に就任したのは1966年のことだった。彼は4代目の編集長だった。*Nature* の創刊は1869年だが、歴代の編集長の在任期間は非常に長く、初代のノーマン・ロッキアーは50年も編集長を務めている。ジョンは1973年に一度、任を退いてデビッド・デイビスに譲ったが、1980年に復帰した。私が彼の後任になったのは、1995年12月のことである。

ジョンが今日の *Nature* の基礎を築いたのは、1期目の編集長時代のことだった。重要なのは (JM は文を副詞で始めるのが好きだった)、いささか身びいきなところもあったそれまでの密室的な論文選定システムを捨て、査読のシステムを確立したことである。ジョンが最後に携わっ

た号の退任の挨拶のエッセイには、このあたりの経緯が彼一流の読みやすい文章で綴られている (*Nature* 378,521-523;1995)。

彼は、自ら断行したこの変革に対して複雑な態度をとっていた。彼はよく、「1953年に査読のシステムがあったら、DNAの二重らせん構造についてのワトソンとクリックの論文は絶対に採用されなかつただろう」といつていた。彼はまた、査読のシステムは真にオリジナルな研究が世に出るのを妨げるのではないかという不信感を常にもっていて、1期目の編集長時代には論文を査読にまわさないこともあった。

Nature に確固たるジャーナリズムの伝統を築いたのもジョンだった。彼は多くの才能に恵まれていたが、何よりもまずジャーナリストであり、その肩書きにも腕前にも誇りをもっていた。彼は物理学者として教育を受け、研究に従事していた。彼は圧倒的な知性を持ち、論文を読んだとたんに、その研究内容を吸収することができた。彼は腕利きのサイエンスライターであり、新聞の科学欄記者としてかなりの経験を積んでから *Nature* に乗り込んできた。今日の科学メディアを代表するライターや編集者の多くが、彼の時代に *Nature* で仕事をしている。彼らはしばしば独自の方向性を見いだしていったが、編集者として論説を書く機会を見極める方法などはジョンから学んだ。ジョンは、署名なしの Editorial において「*Nature* の声」を確立した (とはいえ、それはしばしばまぎれもなくジョン自身の声だった)。数ページにわたる広範な補足記事をつけ、科学の現状や各国の指導者についての鋭い洞察を説得力ある語り口で報告し、意見を述べるようにしたのも彼である。

人々はもうもうたるタバコの煙のほかにも、ジョンについてどんな想い出をもっているのだろうか？ 私が読者からよく聞くのは、「彼は、この分野の専門家の多くがその重要性に気づく前から、この研究計画を擁護してくれた」と

いう声である。またある人は、彼の決定や意見にはしばしば矛盾があったと語る。こうした矛盾を不快に思う人々もいたものの、論争から距離を置いていた人々は、そのにぎやかさを好意的に評価していた。彼を個人的に知っていた人の多くは、辛辣で鋭いウィットと、時おり垣間見せる人間的な温かみを思い出すだろう。

JMは唯一無二の存在だった。彼がいなくなった今、彼を知り、彼から学んできた我々は、世界の一部が欠けてしまったような寂しさを感じている。けれども、JMの強靱な精神は、今後も*Nature*の繁栄を支え続けてくれるだろう。

Nature 編集長 Philip Campbell (フィリップ・キャンベル)

ジョン・マドックスとの思い出

私は、東京特派員として*Nature*に入社した1986年から、1995年12月にサー・ジョン・マドックスが引退するまでの間、彼と一緒に多くのプロジェクトを手がけるという幸運に恵まれた。

ジョンと私は、1992年10月15日号の日本特集(*Nature* 359, 573-582;1992)と1995年12月7日号の中国特集(*Nature* 378, 537-552;1995)を共同で執筆した。なかでも後者は、ジョンが引退する前に*Nature*に書いた最後の大きな特集となった。この中国特集を書き上げた直後の1995年11月には、私はジョンのふりをしてオーストラリアのシンポジウムに出席するという光栄な役割も演じた。直前になってジョンの都合がつかなくなったからである。私はジョンの言葉をそのまましゃべったのだが、本物には遠く及ばなかった。

私たちは、しばしば日本のヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムを取り上げた。このプロジェクトは欧米ではひどく誤解されていたからである。日本はこのプロジェクトを通じてすばらしい科学的貢献をしてきたが、その業績は今日もなお(特に日本国内で)過小評価されている。けれども私たちは、このプロジェクトへの理解が深まるように全力を注いできたと自負している。

ジョンについて何よりも印象深いのは、ありとあらゆるテーマについて、洞察に満ちた記事を大量に執筆していたことである。彼は、日本の科学政策についても、高エネルギー物理学やビッグバン宇宙論や分子生物学の最新の動向についても、非常に短い時間で、質の高い文章を書くことができた。

私は1986年12月のある月曜日のことを覚えている(月曜日は、その週の*Nature*に掲載するニュースの締め切り日である)。ジョンと私は、東京、岡崎、京都で開催する会議の関係で、朝から夕方まで過密スケジュールをこなしていた。その夜、夕食後に京都大学の教授と一緒に飲酒后、ジョンはボトルに半分残った赤ワインをもってホテ

ルの部屋に引きあげた。*Nature*の論説を書くためである。ジョンは毎週、2つか3つの記事とともに2ページの社説を書き、最近発表された論文を取り上げる1ページのNews & Viewsについても中心的な役割を果たしていた。翌朝、私は早朝の東京行きの新幹線に乗るために、ホテルのスタッフに頼んで彼の部屋のドアを開けてもらわなければならなかった。それでも、彼の論説は締め切りに間に合ったのである…2、3時間ほど遅れていたかもしれない!

ジョンが考えることは、時代の先を行っていた。彼は1970年代の初頭には、*Nature*の姉妹紙として*Nature New Biology*と*Nature Physical Sciences*を創刊し、本誌と合わせて1週間に3冊のペースで科学誌を発行することに挑戦している。彼の*Nature*編集長としての最初の任期が終わったとき、この試みも打ち切りになってしまったが(このあたりの経緯については、今号p.8のWalter Gratzerの追悼文を参照されたい)、*Nature Publishing Group*は今、*Nature*の名を冠した自然科学系の学術誌を30種類以上も発行しているのだ。

1980年代の後半には、ジョンは私たち同僚に対して、論文の全文を「データベース」に入れ、印刷版にはアブストラクトのみを掲載するという構想を語っていた。そうすれば、*Nature*が毎週掲載する論文の本数を増やせるだけでなく、彼が愛してやまない前半のニュース部分に割り当てられるページ数も増やすことができる(ジョンがこの構想を語っていたのは、インターネット時代が到来する前のことであることに注意されたい)。彼のこの先見の明あるアプローチが実現するのはいつのことになるだろう?

ジョンはユニークな人物だった(もちろん、すべての人がユニークな存在だ。しかし、なかには際立ってユニークな人がいる)。彼の思い出と影響は、肉体の死を越えてはるかに生き続けるだろう。

Nature Publishing Group (NPG)

パブリッシング・ディレクター

NPG ネイチャー アジア・パシフィック 代表取締役社長、CEO

David Swinbanks (ディビッド・スウィンバンクス)